

# “三人の女” vs “第四の男”、あるいは 物語における意味作用と現実指示

—— ピエール・ロチ著「カスバの三人の女」を読む ——

遠 藤 文 彦\*

ピエール・ロチの小品集『倦怠の華<sup>1</sup>』所収「倦怠の華」の作中話である「カスバの三人の女<sup>2</sup>」は、長短合わせて 50 の節からなる小話<sup>3</sup>であり、そのうち第 49 節が「結末」、第 50 節が「教訓」となっている。

「カスバの三人の女」は、それ自身のうちに、さらにある挿話を含んでおり、内容的には、後者が前者の象徴をなしているように見える。すなわち、メインの話であるカスバの 3 人の女の話には、そこに込められた教訓を寓意的にかたどるかのよう、3 匹の犬の話が組み込まれているのである。

まず、カスバの 3 人の女の話であるが、この部分は 1~35 節まで全体の 4 分の 3 ほどを占めており、物語の本体をなしている。

---

\* 福岡大学文学部教授

<sup>1</sup> 使用したテキストは、(初版) *Fleurs d'ennui* ; Pasquala Ivanovitch ; Voyage au Monténégro ; Suleïma, éd.Calmann Lévy, 1882、および (再版) *Fleurs d'ennui ; suivie de Pasquala Ivanovitch ; Voyage de quatre officiers au Monténégro ; Suleïma*, éd.Passage du marais, 2003 である。

<sup>2</sup> 「カスバの三人の女」の翻訳および解説として、遠藤文彦「ピエール・ロチ「倦怠の華」翻訳と注(中)」『福岡大学研究部論集』第 5 巻第 1 号 pp.41-67, 2005 年を参照のこと。本稿における引用に付した頁数はすべてこの翻訳の頁数である。

<sup>3</sup> 副題に「東洋風の小話」«Conte oriental» とある。

3人のカスバの女、すなわち母とその2人の娘は、家長を「フランス人に対して起こされたある反乱」(45)で亡くした寡婦と孤児であり、経済的に困窮している。彼女たちは、カスバの高みで、毎日を無為に過ごしているかに見えるが——「三人の女たちはその古びた白い牢獄の中でひねもす退屈していた」(同)——、日暮れとともに、おもむろに化粧を始め、艶美な衣服に身に包む…。3人は、じつはヨーロッパ人相手の売春をなりわいとしているのである。彼女たちの«ennui»は、作品全体のテーマでもあり、文脈的(物語的、心理的)には倦怠(*de l'ennui*ないし*l'Ennui*)と読むことができるが、現実的(歴史的、経済的)文脈——植民地主義のそれ——からは困窮(*des ennuis*)と読むべきであろう(そのように作品に書き込まれているのであって、現実的文脈からといっても、現実には照らしてというのではなく、テキストに照らしてそうなのである)。

彼女たちは外国人=異教徒によって暴力的に *ennuis* を被ったのであり、彼女たちの売春は、その強いられた経済的困窮(*des ennuis d'argent*)を脱するための手段、受けた損失を回復する手立てなのである。また、その行為によってフランスの船乗りたちに病(梅毒)を移すことも、やはり自分たちが被った健康上の害(*des ennuis de santé*)を彼らに返しているにすぎないということになり、したがってこれもまた因果応報の原理からして正当な行為であると言える。

なるほどそれは、因果応報を否定するキリスト教の原理から見れば不当な行為であるかもしれない。けれども、ことはまさしくその点において、かくのごときキリスト教的原理の否定にまでおよんでいるのである。「おのれの悪徳と貧困に責任を持たぬ彼女たちにしてみれば、異教徒がもたらしたものを他の異教徒に返してやったというだけのこと」(64)というわけである。かくして「カスバの三人の女」は、受けた *ennuis* を相手に返すという意味で、たとえ反キリスト教的と言われようとも、経済学的には至極正当な報復の物語なので

ある<sup>4</sup>。

つぎに、話は物語の終盤（36～48節）で唐突に犬さらいの話に切り替わる。3匹の犬が2人の犬さらいにさらわれそうになっていたところ、3人の船乗りにも助けられ、その3人の船乗りは、犬さらいを懲らしめるべく2人をひどい目に遭わせるが、彼ら3人もこの事件がもとで軍規により懲戒に処されるという話である。こちらの話も、文字通りには無残な話であるが、3人のカスバの女たちの悲壮な調子に比べれば、戯画の様相を呈しており、滑稽譚の趣をもっている。

そして最後に、話全体を締めくくる「結末」（第49節）として、後日談（ブルターニュ人水夫の処分、バスク人水夫たちの病氣と死、犬さらいの哀れな運命）が語られ、さらにそれに一個の「教訓」——寓話にはつきものであるところの教訓——（第50節）が付されているのだが、それは次のようなものとなっている。

#### 教訓

人に害を与えようとするのはいついかなるときでも間違っている。なかんづくそれが、この物語に出てくるようなひとつなつこい良犬である場合には。早晩報いを受けるのは必定だ。このことは、プラムケットよ、これらの犬さらいの運命によってはっきりと証明されている。（65）

ここで言う「人に害を与えること」「faire du mal」が「人に迷惑をかけること」「faire des ennuis」と同義であることは明らかだ。そしてこの教訓は、直接的には犬さらいの話から導き出される教訓とされ、純粋に道徳的なものとして一般化されており、その意味で一見無害化されているように見えるが、歴史

---

<sup>4</sup> 3人の «ennui」、あるいはロチの後年の小説のキーワードで言い換えれば、「désenchantement」は、幻滅という受動的意味のみならず、（政治的歴史的）現実への覚醒という能動的意味でも捉えなければならないだろう。

的コンテクストに照らしてみれば、そこには特殊な政治的意味が見出され、痛烈な反植民地主義のイデオロギーを読み取ることができるであろう。

じつのところ、三匹の犬の話は、最後の教訓を誘導するための装われた範例 (*exemple*) にすぎない (その意味でそれは 17 世紀的寓話 (フェーブル) や 18 世紀的小話 (コント) の擬態なのである)。要するに、物語が担う反植民地主義という危険思想を表向き無害化するのが、滑稽な犬さらいの話と、それに続く、とってつけたような教訓の役目なのである<sup>5</sup>。

\*

ところで、この「カスバの三人の女」という小話に対しては、話の聞き手であるプラムケットが常のごとく辛口の批評を加えている。じっさい、「倦怠の華」という小説の作中話である「カスバの三人の女」は、直接的には、われわれ読者にはではなく、作品中の聞き手＝プラムケットに向けられたものなのであり、そうした言説の性質上、本来、独立した物語としてではなく、プラムケットとの対話の中で、それと連関させて読まれなければならないのである。

問題のプラムケットの批評は、総じて否定的で、要するに「君の小話には頭も尻尾もなく、その教訓たるや、じつに間が抜けている」(65) というものである。

しかしながら、この判断はそれ自体としてけっして正しいとはいえない。それは、対象となっている物語を、平板に、文字通りに捉える限りでしか正しくない。じじつ「物語の主人公、つまりあの犬たちのことだが、やっと話しの中ごろになって出てくるだけだし、題名にある三人の女たちは結末に登場しない」

---

<sup>5</sup> このような反植民地主義的読みについては、ドニーズ・ブライミの論考 Denise Brahim, «Les Trois dames de la Kasbah : une drôle d'histoire», in *Les Méditerranées de Pierre Loti*, Aubéron, Bordeaux, 2000 を参照のこと。

(同) というふうに見ることは、要するに、この物語を、直線的な、単一の筋からなるものと捉えることであり、逆に、一方の話が他方の象徴となるような、反復と照応の下では捉えていないということである。そしてその意図は、二つの話の間の主従関係を転倒ないしは混乱させることにある。

二つの話の間の照応関係、つまり一方（3匹の犬の話）が他方（3人の女の話）の寓意であるという象徴関係は、十分すぎるほど明らかで、プラムケットのような解釈は、よほど素朴な読者でなければなしえない。ロチ自身、話を始める前に「[...]そこからひとつ教訓を引き出して、それを君にしかと示してやろう。[...]それでもって君に、君はそれに異議を唱えたけれど、僕にだって首尾一貫したまともな物語を作り、それを教育的なものにすることができるというところを見せてやろう<sup>6</sup>」と宣言しておいた通りである。つまり、この際彼にとって重要なのは、自分が首尾一貫した物語を作ること、さらにはそれを教育的なものとする事そのものなのである。そうすることは、それ自体が目的なのであって、創作の結果ではない。ここには、自分が物語作者としてまともな能力、手腕を備えているということを、それについては懐疑的なプラムケットに誇示するという、少なからず倒錯的な動機が働いているのである。

しかしこの点からすると、プラムケットの評言もまた、誠実な批評というよりは、まるで相手の言うことにいちいち突っかかることが自分の役目でもあるかのような自己目的批判、さらには単なる言いがかりであるような印象がある。じじつ、2人は「いついかなるときも距離を置いてしか良友たりえなかった。これは既成の事実であって、つまり、君はつねに僕に喧嘩を売ってきたというわけだ」（66）とある通りである。とすれば、プラムケットの批評はいわば逆アイロニーとして、そもそも裏返しに取るべきなのであり、それゆえ、ロチの話がまさしく首尾一貫したものであることの証左でさえある。

---

<sup>6</sup> 遠藤文彦「ピエール・ロチ「倦怠の華」翻訳と注（上）」、『福岡大学研究部論集』第4巻第4号 p.62

このようなひねくれた言辞には、当然のことながら、戦略的な意図が想定される。つまり、プラムケットの批評は、象徴を故意に文字通りに捉え、意図的に的外れな解釈を示しているということ、要するに、彼の批評の素朴さは装われた素朴さであるということであり、その目的は、この際、作品に込められた反植民地主義的イデオロギーを隠蔽することにはかならない。プラムケットの批評は、ロチの計略に与するおとりであり、軍人が反植民地主義的主張をするというジレンマをかわすための自己韜晦、つまりは、危険思想を無害化するための一種の陽動作戦なのである。

\*

かくして、それ自体としてかなり明白に反植民地主義的小話と読みうる「カスバの三人の女」は、それに批判を加えるプラムケットの言葉を逆アイロニーないし自己韜晦と取ればなおさら、「頭も尻尾もない」どころか、むしろ頭から尻尾まで——3人のカスバ女の話から、3匹の犬の話へ、話の教訓まで——終始一貫した物語であることを、容易に見て取ることができる。

ところが、この物語の創作に関する事実には、これよりも少しばかり容易ならざるところがある。というのもこの小話には、3人のカスバの女の話、3匹の犬の話、そして話全体の教訓とは、また別の次元ないし系列に属する第4の契機、あるいはそもそもの第1の契機と言うべきものがあるからである。その契機、作品そのものとは次元を異にする契機とは、物語の参照物（指示対象）であるところの、日記に記された現実の出来事の契機である。じじつこの小話は、1880年にロチが実際に体験したある出来事をもとに書かれている。

4月25日 日曜 —— コルベール号艦上にて大舞踏会の日。僕はフリードランド号に詰める。

三時、三人のモール人の女が小船に乗ってやってきて、彼女らのお出ましに大いに驚いている当直士官に僕の名刺を見せる。三人は艦内に通され、僕に会わせるため士官食堂まで連れてこられる。ファトマーとその妹、そして付き添いの母親である。美しい装い、かなりもったいぶった様子、よきイスラムの女として眼のところまでベールで身をくるんでいる。白絹のパーヌース越しに、金の刺繍を施された上衣と絹の下穿きをまとっているのが十分に見て取れる。食堂のクッションに腰を下ろすと、ベールを上げて差し出されたコーヒーをもらう。彼女らの立ち居振る舞いは申し分なく、みんなは彼女たちをたいそう綺麗だと思う。

五時、晚餐のためにコルベール号の舞踏会にシ・サイド君をむかえに行き、再会したかつての級友で参謀付き士官となったクルトベスとともにフリードランド号に連れて帰る。

カスバでの一夜…

[…]<sup>7</sup>

ロチは、日記に記されたこの現実の出来事をもとに、そこになにがしかの脚色をほどこしながら、すなわち、ときに無意味なことや都合の悪いことを削除したり、とりわけ虚構であれ現実であれ日記には記されていないことを付け加えたりしながら、「カスバの三人の女」を創作したものと思われる<sup>8</sup>。もとよりそれは、『アジャデ』をはじめとする彼の小説作品の創作過程に共通することで、ロチのいつものやり方なのである。

しかしながら、よく見してみると、そこには、日記には記載されていないながら、作品には欠落している、ある重要な要素があるのがわかる。つまり、一見連続していると思われる日記と作品のあいだには、ある決定的断絶があるのである。欠落しているその要素とは、この出来事における経験の主体であるところの、ほかならぬロチその人の存在である。

---

<sup>7</sup> *Cette éternelle nostalgie*, La Table Ronde, 1997, p.78. (ロチ書簡集『永遠のノスタルジー』)

<sup>8</sup> 『日記 I』(前掲書)の注には「ロチが『三人のカスバの女』を書くのに用いた女の訪問者たち」と記されている (*Journal intime I*, p.129)。

この小話において、なるほどロチは登場人物としては直接姿を現してはいないように見える。それでも、語り手として、ある意味で第三者的かもしれないが、観察者の立場に立って作品に介在しているとは言えるだろう。しかしながら、そもそもの出来事を生きた実在あるいは実存的存在としてのロチの姿は、にわかには見当たらない。創作過程の出発点に位置する経験の主体であるロチは、「カスバの三人の女」の物語においてすっかり姿を消してしまっているようなのである。

しかしながら、この作品には、ロチその人の存在そのものではないが、その痕跡というか、まさに彼の不在を埋め合わせるかのような象徴的人物の存在が認められる。その人物とは、すなわち3人のブルターニュ水兵たちがカスバで拾ってきた1人のズアーヴ兵である。

作品中、カスバの3人の女の話を3匹の犬の話を時間的にも空間的にもつなぐような形で、ブルターニュの3人の水夫たちがカスバの歓楽街をはしごしてまわる場面が語られている。その際3人の水兵は、とあるいかがわしい場所で、乱痴気騒ぎに類する宴がおこなわれているところに出くわす。そこには「十組ほどのズアーヴ兵と水夫のカップル」(58)がいて、「ズアーヴ兵は水夫の服をまとい、水夫はズアーヴ兵の帽子を被って」(同)おり、「互いに腰に手をやり」(同)「神妙な面持ちで踊って」(同)いた。そこでわれらが3人は、「自分たちもズアーヴ兵に服を着せて、そいつを弟分にしよう」(同)と考える——「ブロンドの大男が喜んで話に乗ってきたので、その男を変身させるべく、めいめいが自分の水兵服の一部を彼に与えた。[…]この新入りを加え、彼らはいまや総勢四人となり、いままで以上に酔っ払って、ふたたび街をさまよいはじめた。」(同)

この第4の男は、物語においてどんな意味を持ち、どんな役割を担っているのだろうか。じつのところ、物語を読んでいる限りでは、けっしてその解答が得られない。つまり、その人物は、物語の中でどんな意味も持たず、いかなる



役割も担っていないように思われるのである。かくも意味に満ち、かくも一貫した物語の中で、この第4の男には、いかなる意味も見出すことができず、いかなる役割も負わされていないようなのだ。

ズアーヴ兵は、話の中でも正体不明の人物として扱われている。別行動を取った3人のバスク水兵が、明け方になって3人のブルターニュ水兵に合流するが、彼らは「ひげ面の四人目がいるのを見て、なんだろうと思った、——あのズアーヴ兵だ」（63）とある通りである（「あのズアーヴ兵だ」と解説しているのは、むろん語り手であって、バスクの水兵たちではない）。ブルターニュ水兵が彼を連れて帰艦したときも、「艦上で、みながこの男を見て訝しがった」（64）とある。

ものごとを象徴主義的に見てみても、4番目の「4」という数自体、圧倒的に「3」の支配的なこの物語においては、その存在根拠が薄弱であるように見える。3人のカスバの女、3人のバスク水兵、3人のブルターニュ水兵、3匹の犬（ちなみに、日記で出来事の起きた時刻も3時であった）…「3」は、その執拗な反復において、象徴として強く作用しているようなのだ。

「2」について言うと、それはイヴが拾ってきた猫の数であり、双数として豊穰ないし多産の数となっている——「その後、二匹は子供をたくさん生んだ」。それは、犬さらいの数として陰画的に反復されてもいる<sup>9</sup>。

一方この「4」は、「3」に付け加えられた4番目としての「1」からなっており、それも独自の単独者、根源的唯一者としての「1」に対応するものではなく、あってもなくてもいいような付け足し、余録の「1」なのである。それは、物語において反復されず、照応すべき対応物を持たない。かくしてこのカスバの第4の男は、物語上無意味なだけでなく、象徴的にも無価値であるように見える。

---

<sup>9</sup> ロチの作品における「3」と「2」の象徴的意味については、拙著『ピエール・ロチ 珍妙さの美学』法政大学出版局の第3章を見よ。

象徴を生み出す照応関係に浸り、徹頭徹尾意味に貫かれた物語に、これほどまでに無意味かつ無価値な存在が存在するというのは、じつに不可解である。

しかしながら、事態をそっくり反転させて見るなら、意味と象徴に満ち、寓意と教訓に覆われたこの物語においては、これほどまでに徹底して無意味かつ無価値な存在こそ、まさしくその無意味さ、その無価値ぶりにおいて強烈に意味し、強力に機能していると言うことはできないだろうか（差異のあるところ、いたるところに意味ないし価値は生まれてくるのだから）。

そして、それが何を意味し、何として機能しているのかと言えば、つぎのようにしか言いようがない。すなわち、ほかでもない作品の<sup>レフエラン</sup>対象物の痕跡=象徴として機能しているのであり、まさしく日記には記載されているながら作品では欠落している経験の根源的主体としてのロチを（意味しているという以上に）指し示しているのだ、と。

これは、もっともらしくはあるが、根拠のない当て推量の判断だろうか。

否、この直観を支える根拠は、テキストにおいて、先に見た話の聞き手であるプラムケットの発話のうちに求めることができるように思われる。じっさい、その発話を通して、物語において徹底して不在であったロチその人のひとりに関する言辞が、まるでその不可解な欠落の埋め合わせであるかのように、プラムケットの口から堰を切って出てくる。

1) まず、プラムケットは、上述の小話の感想を述べた直後に、ロチとともにしたアルジェ滞在の記憶を蘇らせる。「君の描写を読んでいると、もうじき3年前のことになるが、偶然僕らがアルジェで過ごすことになった春のことを思い出す。」（「3年前」——またしても「3」！——と言われているが、実際は2年前の1880年のことである。）ここでは、具体的には2つのエピソードが、2人の共通の思い出として追想され、記録されている。そのうち少なくとも「ムーア風呂」をめぐる出来事は、アルジェ滞在直前のオラン（メルス・エル・

ケビル）における 1880 年 4 月 9 日付けの日記で確認することができる<sup>10</sup>。取るに足らないような出来事だが、その取るに足らなさがまさしく出来事の実在性に差し向けられているのだと考えられる。

2) つぎに、プラムケットは、今度はロチの人格の構成について、興味深い比喩をもって語っている。

… たしかに君と僕のようにおよそ複雑な性格の人間同士では、なかなか意見が一致するものではない。

状況や環境が僕らの人格のまわりに種々雑多な層を定着させたので、僕らのうちには、あらゆる種類の動物はいわずもがな、多種多様な人間がおおぜい棲んでいる。それらすべての人間ないし動物が、じゅんぐりに、時と場合に応じて現れてきては、なにか嫌気のさすような疲労感に浸りながら身動きせず無気力にうずくまっている内奥の存在に代わって、語り、行動する。

[…]

かたや君の弟分イヴォンだが、あれはじつに純朴で、健全で、かつとても澁刺とした強い個性の持ち主であって、いつでも安心して当てにできる男だ。彼は彼自身であって、それ以外のなにものでもない。そして、君の内において最も生き生きし、君のあらゆる外見の下において最も一貫したものを体現している。すなわち原始人を。

原始人、先史時代の未開人。親愛なるロチよ、これこそが君自身の内奥に潜んでいるものだ。(66、太字強調は引用者による)

プラムケットによると、自分やロチのような人間は、それ自体が雑多な「層」＝「人間」からできており、それらが「時と場合に応じて」表面に現れてくるのだが、それらの中心には核となる「人格」があって、この際それは「なにか嫌気のさすような疲労感に浸りながら身動きせず無気力にうずくまっている」「内奥の存在」である、ということである。

ここで注目してみたいのは、「層」«couches» という比喩であり、それは

---

<sup>10</sup> 『永遠のノスタルジー』前掲書 72 頁。

少し後で「外見」«enveloppes» と言ひ換えられてもいる。とくに後者の「外見」は、文字通りには「外皮」のことであり、言ってみれば裸体を隠す衣服、あるいは人の「魂」を包む覆いのことである。「種々雑多な層」からできている「人格」の比喩を衣服の比喩でもって言い換えれば、「内奥の存在」を覆う人間の外観は、いわばその都度のパッチワークからなっているということになるであろう。

しかるにこの比喩は、問題のズアーヴ兵の身なりにじかに通じている。「その男を変身させるべく、めいめいが自分の水兵服の一部を彼に与えた」(58) というわけで、この男は3人のブルターニュ水兵の衣服の別々のパーツからなる水兵服をまとっているのである。

一方、寄せ集めてできたその水兵服が包んでいるのは、粗野で単純素朴なズアーヴ兵である。この点にもプラムケットの解説は符合する。つまり、彼によれば、「種々雑多な層」の底に潜む「内奥の存在」、「多種多様な」「外見の下にあって最も一貫したもの」は、ブルターニュ水兵のイヴが象る「原始人」、「先史の未開人」なのである。ここには、「寄せ集めの水兵服／粗野で単純素朴なズアーヴ兵」の二重構造に、「層＝外皮／原始人＝イヴ」の二重構造が対応するかたちで相同性が成立している。ロチは、一方において「内奥の存在」、つまり自分自身とのずれ（＝ズアーヴ兵に着せられた彼自身のものではない寄せ集めの水兵服）によって規定され、他方、「彼は彼自身であって、それ以外の何者でもない」という自己に一致したイヴの存在（＝ズアーヴ兵）によって規定されるという、「複雑」な人格をなしているというわけである<sup>11</sup>。

以上の指摘に、ロチが変装・仮装に強い嗜好を持っていたという、広く知られた伝記的（かつ伝説的）事実を加えてみるなら、水兵のコスチュームを着せ

---

<sup>11</sup> 見たとおり、一連の比喩は、ある種の人格のトポロジーに由来している。そして、自分と一致し、自分に対して聡明な存在としての「原始人」・「未開人」の比喩は、言うまでもなく、それ自体ある種の神話に基づいており、イデオロギーに由来している。

られた第4の男がほかならぬピエール・ロチを象っているということに、なお一層得心がゆくことであろう。

3) さらに、プラムケットは、内奥に原始人を秘めた作家であるロチが分類不可能な作家であることを強調している。

しかし、明言するが、僕は君をいかなる作家の範疇にも入れることができない。君はきわめて独自なかたちで君であり、誰も君に名前を与えることはできない。君に既知のレッテルを貼ろうとして、人はつねに誤りを犯すことになる。精神科医か古生物学者、さもなくば南洋の大海原で病気の鯨を治療するのに慣れた獣医が、文芸批評を始めるというのでもなければね。白いつぐみをごらん。そいつをカササギと言う者があれば、カケスだと言う者もあり、モリバトだと言う者もいる。

本当はどれでもない。そいつは特殊な生き物なのだ。

君もまた然り、親愛なるロチよ、君は他に類を見ない者であり、いかなる既知の鳥種にも属さない。(67)

文中の「白いつぐみ」«merle blanc»とは、非常にまれなもの、稀有な存在、優れた人物を指して言うときの常套句だが、ここでは、なんといっても皮肉屋のプラムケットの口から出た言葉であるから、出来合いの贅辞というよりも、文字通りの強い意味、すなわち分類不可能な存在、ここで言うところの「レッテル」を貼ることができない人物の意味で使われていると見るべきである。

周知の通り、ピエール・ロチには、エキゾチズムの作家、異色の作家、時代遅れの作家など、さまざまな「レッテル」が貼られているが、この点、プラムケットの判断——「僕は君をいかなる作家の範疇にも入れることができない」——は、そうした一般的意見とはまったく異なり、当時の批評、さらには今日の支配的見方へのアンチテーゼとなっている。

一方のズアーヴ兵に関して言うと、彼は話の中で正体不明の人物として扱われていたのであるから、この点でも符丁が一致する。すなわち、彼を見たバスク水兵は「ひげ面の四人目がいるのを見て、なんだろうと思った」のであり、

ブルターニュ水兵が彼を連れて帰艦したとき、「艦上でも、みながこの男を見て訝しがった」のであった。物語上、無意味かつ無価値で、何の有用性も担っていないこの第4の男、そして物語中も正体不明とされるこの人物こそ、レットテルを貼ることの不可能な作家ロチ、「白いつぐみ」であるところのロチその人のかたどっていると言えるだろう。ズアーヴ兵は、その無意味さ、無価値ぶりにおいて、「白いつぐみ」の象徴的等価物なのである。

最後につぎのことを付け加えておきたい。すなわち、ロチの小話とプラムケットの評言とを突き合わせて読むというのであれば、「人に害を与えようとするのはいついかなるときでも間違っている」という物語の教訓も、プラムケットの教訓「君に既知のレットテルを貼ろうとして人はつねに誤りを犯すことになる」と対応させて読むべきではないか、ということである。

2つの教訓は、同じことを別様に表現しているにすぎない。つまり、「人に害を与える」者は必ずや「報いを受ける」のだとすれば、逆に、そもそも人に害を与えない者を罰することはできないということ、すなわち、いかなる「範疇にも入れることができない」ものを分類しようとする、こと、「名前を与えることができない」ものを名づけようとする、こと、「レットテルを貼ること」のできないものにレットテル貼ろうとする、ことは、つねに「誤り」だということである。

じっさい、人に害を与えない者であるという点でも、ズアーヴ兵とロチは等価である。経済的困窮をもたらし、健康的害悪を及ぼしたものが報いを受けるという、ennuisをめぐるこの因果応報の物語の中で、ただひとり害を与えない者がいるとすれば、それはあのズアーヴ兵が象る第4の男をおいてほかにない<sup>12</sup>。それも、事実上害を与えないというだけでなく、そもそもいかなる因果

---

<sup>12</sup> この点ズアーヴ兵は、3人のブルターニュ水兵の仲間に加えられてから、彼らとともに2人の犬さらいを懲らしめている（37～38節）ではないかという指摘があるかもしれない。しかし、彼らの行動は別にして、総勢4人となった後の「彼ら」の主観は、あいかわらず3人のブルターニュ水兵のみのそれであり、ズアーヴ兵の主観は希薄化、さらに

応報のシステム——因果応報的なものとしてのシステム——にも属していないゆえに分類不可能であると言う意味においてである。じじつ、水兵たちが帰艦したとき、ひとは彼を「騒ぎになるのを恐れて、念のために鎖に繋いだ」（64）のだが、それは、正体不明のものはそれ自体としては懲罰の対象にならないということにはかならない。身元不明なものをどうして処罰できるだろうか。結局「全員が、とくに三人のブルターニュ人は、厳しく処罰された」（同）のも、「ズアーヴ兵の身元が晩になってようやく判明し」（同）てからのことにすぎない。人に害を与えない者を、無垢な者・無罪の者と呼ぶことができるだろう。イノセントとは、もともと「人に害を与えない」という意味なのである。

また、いかなる範疇にも入らず、名前を持たず、レッテルを貼りえないものを、ニュートラルと形容することもできるだろう。「白いつぐみ」は、無垢なるものとしてのニュートラルなものを見事に形象化している<sup>13</sup>。ここでの「白いつぐみ」とは、一見そう思われるように、「黒い太陽」と言うがごとき、対象のエキセントリックな個性をヒステリックに誇張して表現するものではない。「白いつぐみ」は、白と黒の混合物、すぐれて中間的な色、中性の色である灰色を分析的ないし説明的に定義する、迂遠な表現なのである。つまり、レトリックの用語で言えば、それは撞着語法 oximoron ではなく、むしろ迂言法

---

は無化されている。じじつ、3人のカスバの女のことや3人のバスク水兵のことを「考え」たり、後者を助け出そうと「思った」りしたのは、明らかに3人のブルターニュ水兵であり、彼ら以外にはありえない（35節）。「今しがたの夢見る男たち」（37節）という表現も、内容的には、それらの「考え」、「思い」に加え、故郷ブルターニュの情景を想起する（36節）ことの出来る彼ら3人のみを指示していると考えざるをえない。それゆえ「いかにも酔っ払いらしい愛情に駆られて野良犬たちを放してやるように言った」のは「彼ら」3人のブルターニュ水兵のみということになる。かくして、ズアーヴ兵は、行為は別にして、主観的には、3人のブルターニュ水兵が形成する懲罰的・加害的主体には与していないのである。

<sup>13</sup>「つぐみ」は現実にも黒っぽい鳥であり、意味素として実質的に「黒」を代表している。すなわち、「黒つぐみ」«merle noir」は「並つぐみ」«merle commun」と同一であり、一方、「白つぐみ」«merle blanc」は「白化」«albinisme」による突然変異（「白子」）を別にすれば、分類学上存在しない（*Le Grand Robert*）。

périphrase なのである。

以上のように、「カスバの三人の女」とそれに続くプラムケットの評言をつき合わせてみると、テキスト上、登場人物であるズアーヴ兵が語り手ロチと等価であることがわかる。さらにそれは、テキストを超えて、日記に記録されているながら作品には不在である作者ピエール・ロチとも等価である。

仮に、プラムケットの評言といういわばヒントがなかったなら、そしてロチの日記という実証的資料がなかったなら、これら等価関係を見出すことはできなかったかもしれない。しかし、そうであったとしても、かのズアーヴ兵が、まさに無意味で無価値であるにおいて、何ものかを意味していることはわかったであろう。あるいはむしろ、何も意味していないことにおいて、何かを指示していることはわかったであろう（指示対象が不明でも、指示作用は存続するのである）。われわれは物語の意味を解釈することしかししないわけではない。テキストの象徴ないし形象を知覚することもあるのだ。

いずれにしてもズアーヴ兵は、意味に捉えられる前の純粋な象徴であり、いまだ体系に属さない無垢で中立的な形象である。かくも強力に無意味で、かくも徹底して無価値なものは、純粋な象徴、象徴の極みであると言える。この能動的な無意味さは、いわゆる「現実効果<sup>14</sup>」として意味作用に回収される反動的な無意味さではない。それは、いわば無償の無意味さであり、レフェランの痕跡、その象徴なのである<sup>15</sup>。これをシニフィアンと呼ぶこともできるだろう。それは記号として意味は持たずとも、象徴としてレフェランは持ちうる。言い

<sup>14</sup> ロラン・バルトの用語。写実主義的な描写における一見無意味と思われる記述が、じつは間接的にその記述対象が虚構ではなく現実のものであることを意味する二次的記号（コノテーション）になっているという欺瞞的プロセスのこと。cf. Roland Barthes, «L'effet de réel», in *Oeuvres complètes*, tome II, p.479-484.

<sup>15</sup> ちょうど、いかなる書き物も、最終的にはその書き手の過ぎ去った実在の痕跡であり、その人の消失＝死を明示する証しでもあるのと同じように。ズアーヴ兵は、その無意味さと現実指示機能において、あらゆる書き物の最終的意味と価値の象徴でもある。



換えれば、テキスト内に対応物を持たないゆえに記号ではないが、現実を指示するゆえにあくまで象徴なのである。そしてそれは、意味ではなく、レフェランを指向することにおいて、テキストに日記という記録の次元を導入し、記録としての日記と等価なものとなりうるのである。

「三人のカスバの女」は日記をもとに書かれた作品である。しかしそれは、現実の痕跡を含んでいることにおいて、日記と等価なもの、さらには日記そのものでもある。その意味でロチは、日記をもとに作品をなしているだけでなく、作品をして日記たらしめてもいる、と言えるのである。